慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「愚」の系譜 : 中国古代文人精神の表象として
Sub Title	On the genealogy of 'foolishness' in the ancient Chinese mind
Author	八木, 章好(Yagi, Akiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2013
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.105, No.1 (2013. 12) ,p.1 (266)- 22 (245)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山下輝彦教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01050001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「愚」の系譜

――中国古代文人精神の表象として

八木　章好

はじめに

本稿は、中国の文人精神における「狂」と「痴」をテーマとする研究の一環として、これらと通底する意義を含む概念である「愚」に関して、その系譜を先秦から唐末まで概観し、中国古代の思想・文学に現れる「愚」の諸相について考察を加えるものである。

「狂」や「痴」は、文字通り、元来は貶義の概念を表す語であるが、特殊な思想的、文学的文脈に置かれる時、貶義は褒義へと転換され、古来、文人たちの思想傾向や処世態度を顕示するものとなってきた。しかしながら、字義の褒貶の転換は無条件に行われるわけではない。原義が貶義であっても、見方によって褒義に解することのできる要素をその文

字自体が内包している場合、あるいはその文字の古い用例にプラス価の含意が与えられている場合にのみ、褒貶の転換が許されたのである。「狂」と「痴」はまさにその典型であり、「愚」や「拙」もまた同様である。「愚」字は、『説文解字』巻十「心部」に、

戇(おろ)かなるなり、心に従い禺に従う。禺は、猴の属なり、獣の愚かなる者なり。[1]

とある。「禺」を愚かな猴の属としているが、白川静『字統』は、「禺は水神の名とされることが多いが、その実体は明らかでなく、字形からみて、頭部の大きな爬虫類であろう」と別解を示している。段玉裁『説文解字注』には、「愚者は、智の反なり」とある。「愚」は「智」と相対立する語であり、才智が働かないこと、智恵・分別の無きさまをいう。[2]いずれにしても、「愚」字そのものの成り立ちを見る限りでは、これを褒義に解釈できる余地はなく、先秦の文献における用例にその端緒を探っていかなければならない。

一　儒家における「愚」

『論語』には、「愚」の用例が六カ所に見られる。[3]「陽貨」篇に、

仁を好みて学を好まざれば、其の蔽や愚。知を好みて学を好まざれば、其の蔽や蕩。信を好みて学を好まざれば、其の蔽や賊。直を好みて学を好まざれば、其の蔽や絞。勇を好みて学を好まざれば、其の蔽や乱。剛を好みて学を好まざれば、其の蔽や狂。[4]

とある。「仁」「知」「信」「直」「勇」「剛」の六つの徳目において、これらを好むも学問を好まないと陥りがちな弊害として、それぞれ「愚」「蕩」「賊」「絞」「乱」「狂」を挙げている。「愚」は、学問をしないことにより、智恵を欠き、是

非の判断ができず、愚昧無知であることをいう。同じく「陽貨」篇に、

唯だ上知と下愚とは移らず。[5]

とある。最上の知者と最下の愚者は変わりようがないとするものであり、「下愚」は教育の対象から切り捨てられた存在である。ここでの「愚」もまた「愚蒙」「愚劣」をいう貶義であり、「愚」の原義そのもので用いられている。

次に、「為政」篇に、孔子が顔回について語った一節が見える。

吾回と言うこと終日、違わざること愚なるが如し。退きて其の私を省みれば、亦た以て発するに足る。回や愚ならず。[6]

ここでは、「愚」字そのものは貶義で用いられているが、これが孔子第一の高弟顔回について語られている言葉であるゆえに、原義を超えた含意が加えられるようになる。貧困の中で道を楽しむ顔回について、孔子は「賢なる哉回や」（「雍也」篇）と讃えている。饒舌に議論を挑むことなく、寡黙であたかも愚か者のように見える人物が、実は真の賢者であるところから、後世、この一節は、表面的な「愚」が却って内なる「賢」を示唆することを語る際の典拠とされるようになる。

また、「公冶長」篇に、衛国の大夫甯武子について語った一節がある。

甯武子は邦に道有れば則ち知、邦に道無ければ則ち愚。其の知は及ぶべきも、其の愚は及ぶべからざるなり。[7]

孔安国の注に「愚を佯（いつわ）りて実に似たり、故に及ぶべからずと曰う」とあり、漢・荀悦「王商論」にも「甯武子は愚を佯り、接輿は狂と為る」とあるように、甯武子の「愚」は、いわば「佯愚」、すなわち「愚」を装うものであり、「佯狂」と同じく明哲保身の処世態度をいうものである。「愚者」「狂者」として振る舞うことは、時勢を見据えて臨機応変

に行動し、賢明に出処進退を見極めて災禍を避けるという意図の所作であり、乱世における知識人たちのしたたかな智恵であった。[8]

さらに、「陽貨」篇には、太古の民が保持していたものを同時代の人々が喪失してしまっていることを孔子が嘆いた場面がある。

古の狂や肆、今の狂や蕩。古の矜や廉、今の矜や忿戾。古の愚や直、今の愚や詐のみ。[9]

「狂」「矜」「愚」は、いずれも人間の気質における偏向や欠損をいうものであるが、孔子はこれらを必ずしも否定はしていない。同じ「狂」でも「蕩」（勝手放題）ではなく「肆」（自由奔放）なものであればそれは良しと認めているように、「愚」についても、「直」（まっすぐ）なもの、すなわち「愚直」な性格であれば是認しており、人間の本来あるべき姿として、むしろ肯定的に捉えている。こうした状況は、孔子が弟子たちを評した場面にも見られる。「先進」篇に、

柴や愚、参や魯、師や辟、由や喭なり。[10]

とあり、孔子は弟子の高柴、曾参、子張、子路をそれぞれ「愚」「魯」「辟」「喭」と評している。いずれも基本的には貶義の評語であり、弟子たちの欠点を指摘したものであるが、孔子は彼らを譴責しているわけではない。これらは各人の性格上の特質であり、短所ではあるが、見方によっては長所ともなりうる。高柴の「愚」については、何晏『論語集解』は「愚直の愚」と解しており、朱熹『論語集注』は「愚者は、知足らずして厚余り有り」と注している。つまり、愚かではあるが、「愚蒙」「愚昧」というわけではなく、馬鹿正直なまでに真っ直ぐであることをいうものであり、また智恵はやや劣るといえども、人としての敦厚さに富むことをいうものである。孝行を以て称される曾参を「魯」（にぶい）と呼んでいるのも、ただ機転の鈍さを貶しているわけではなく、そうした「魯鈍」な性格の中にこそ、質朴で篤実な人間

性を見ているのである。

『論語』において「愚直」や「魯鈍」に肯定的な評価が与えられるのは、裏を返せば、そうでない人間、つまり利発で能弁な人間が、聡明であるがゆえに往々にして狡猾で功利的であることに対する反撥でもある。「巧言令色」を嫌い「剛毅木訥」を好んだ孔子自身の性癖に拠るところもまた少なくないであろう。

二　道家における「愚」

『老子』には、「愚」字の用例が三カ所に見られる。[11]第三十八章に、

夫れ礼は、忠信の薄にして、乱の首なり。前識は、道の華にして、愚の始なり。[12]

とある。この章句全体の主旨は、「仁」「義」「礼」「智」を唱える儒家に対する批判であり、ここでの「愚」は、道家的な意味で「道」を悟らない人間の「愚蒙」をいうものである。「愚」字の字義としては、原義である貶義のままで用いられている。

次に、第二十章には、以下のような一節がある。

衆人は熙熙として、太牢を享くるが如く、春に台に登るが如し。我独り泊兮として其の未だ兆さざること、嬰児の未だ孩わざるが如く、乗乗兮として帰する所無きが若し。衆人は皆余り有り、而るに我独り遺しきが若し。我は愚人の心なる哉、沌沌兮たり。俗人は昭昭たり、我独り昏きが若し。俗人は察察たり、我独り悶悶たり。忽兮として海の若く、漂兮として止まる所無きが若し。衆人は皆以うる有り、而るに我独り頑にして鄙に似たり。我独り人に異なりて、母を食うるを貴ぶ。[13]

ここの「愚人」は、「道」を体得した聖人をいうものであり、「衆人」「俗人」と相対する。儒家の学問・教育、ひいては文明そのものを否定する道家の価値基準において、「愚」は、そうした文化的、文明的な毒素に染まらない状態をいうものであり、いまだ笑うことすら知らない嬰児のごとく、淳朴自然で、本質的、根源的な人間の在り方を象徴する。文中で「愚人」の心態を形容する「沌沌」は、分別のない混沌とした無知のさまをいう。「衆人」「俗人」たちが「熙熙」として浮かれ楽しみ、「昭昭」「察察」として明るくてきぱきと振る舞うのとは対照的に、「遺」（とぼしい）、「昏」（くらい）、「悶悶」（ぐずぐず）、「頑」（かたくな）、「鄙」（つたない）などの語で形容される「愚人」は、世俗の眼からすれば、役に立たない無能者である。しかしながら、そうした「愚」なる生き方こそが「道」に順った人間本来の生き方であるとするのが、老子の言わんとするところである。本章句の「愚」字は、儒家が重んじる学問知識や礼教道徳を末梢的なものとして退ける老子の思想によって裏打ちされ、道家流のパラドックスを以て褒義に解釈されている。

三つ目の用例は、第六十五章に、次のようにある。

古の善く道を為（おさ）むる者は、以て民を明らかにするに非ず、将（まさ）に以て之を愚にせんとす。民の治め難きは、其の智多きを以てなり。故に智を以て国を治むるは、国の賊なり、智を以て国を治めざるは、国の福なり。(14)

「愚」字について、王弼注に「愚は無知を謂う、其の真順自然を守るなり」とあり、河上公注に「朴質にして詐偽ならざらしむ」とある。ここは、「愚にする」という動詞用法であるが、その意味内容は、上に挙げた第二十章に見える「愚」と基本的に等しく、民を無知で淳朴な状態に置くことをいう。第二十章は「道」を得た特別な存在である聖人の心態を語ったものであるが、老子は一般の民衆もまた同様の心態に至ることを理想としている。ここで「愚」を肯定するのは、第八十章の「小国寡民」に見えるような無知無欲の非文明的共同体を人間社会本来の在り方とする道家の政治理

念に基づくものであり、「百家の言を焚き、以て黔首を愚にす」（『史記』「秦始皇本紀」）といういわゆる愚民政策とは異なる。

なお、『荘子』には、計二十四個の「愚」字の用例がある。大半は「愚蒙」「愚昧」を意味する貶義のものであるが、以下のように、道家的価値観を以て褒義に用いられる例も見られる。

日月に旁び、宇宙を挾み、其の脗合を為し、其の滑涽に置せ、隷を以て相い尊ぶ。衆人は役役たるも、聖人は愚芚、万歳に参わりて成純に一たり。万物尽く然り、而して是れを以て相い蘊む。[15]（「齊物論」篇）

性修まれば徳に反り、徳至れば初めに同ず。同ずれば乃ち虚、虚なれば乃ち大なり。喙鳴を合し、喙鳴合して、天地と合を為す。其の合は緡緡として、愚なるが若く昏なるが若し。是れを玄徳と謂い、大順に同ず。[16]（「天地」篇）

南越に邑有り、名づけて建徳の国と為す。其の民愚にして朴たり、私少くして欲寡し。作るを知りて蔵するを知らず、与えて其の報いを求めず。義の適う所を知らず、礼の将う所を知らず。猖狂妄行し、乃ち大方を蹈む。[17]（「山木」篇）

「愚」字を以て聖人の心をいい、「道」の混沌たるさまをいい、淳朴無知な民がその「道」を踏み行って生きるさまをいうものであり、いずれも『老子』第二十章、第六十五章に見える「愚」の意義を踏襲し敷衍したものである。

三　二人の「愚公」

中国の古い文献には、「愚公」の名で呼ばれる老人が二人登場する。一人は、『列子』「湯問」篇の故事に見える。「老人愚公が、往来の障碍となっている太行山・王屋山の二山を他所へ動かそうと土を運びはじめる。その愚かさを嘲笑さ

れても、愚公は一向に怯むことなく、天帝がその誠意に感じ、山を移し地を平らにした」という話である。これを典拠とする四字成語「愚公移山」は、弛まぬ努力により困難を克服し大事業を完遂させることを語る言葉として用いられる。しかしながら、こうした教訓的な解釈は、この故事の本来の主旨ではない。「愚公移山」は、元来、道家思想に基づいた寓話であり、話の主眼は「愚」と「智」の対立にある。「愚公」の行為を冷笑する人物として「智叟」が登場するが、この二人について、晋・張湛はそれぞれ次のように注を付している。

俗に之を愚と謂う者は、未だ必ずしも智に非ざることなし。
俗に之を智と謂う者は、未だ必ずしも愚に非ざることなし。[18]

世のいう「愚者」は実は「智者」であり、世のいう「智者」は却って「愚者」であるとしている。「愚公」の行為は、常識では想定できない発想、時間を超越した遠大な構想を象徴するものであり、一方、これを愚かとして冷笑する「智叟」は、そうした道家的尺度の世界観を理解できない世俗の人間、もしくはその世俗の既成の価値観を形成している儒家思想を代表するものである。

もう一人の「愚公」は、斉の桓公が出会ったという老人である。劉向『説苑』「政理」篇に、「愚公谷」の説話が収められている。「桓公が猟に出て山谷に入り、老人から谷の名の由来を聞く。子牛を売って子馬を買ったら、若い男に難癖をつけられ子馬を奪われてしまい、土地の人が老人の愚かさにちなんで、その谷を愚公谷と呼んだのだという。桓公が管仲にこの話を告げると、管仲は裁判の不公正を伝えようとした老人の真意を悟る」という内容の説話である。管仲は次のように語っている。

此れ夷吾（管仲）の愚なり。尭をして上に在り、咎繇をして理を為さしめば、安（いずく）んぞ人の駒を取る者有らんや。若（も）

し暴せらるること是の叟の如き者有るも、又必ず与えざるなり。公は獄訟の不正なるを知り、故に之を与うるのみ。請うらくは退きて政を修めん。[19]

この説話の中の「愚公」は、ただの愚かな老人ではない。世を避けながらも時の政治を諷諫する隠者である。桓公はその正体を見抜くことができず、老人を単なる「愚蒙」と見なすが、名宰相管仲は、谷の命名の話も牛や馬の話もすべて虚構であり、これに仮託して当世の裁判制度が公正でないことを諫めようとした老人の意を悟る。そして、「我こそ愚なり」と襟を正すのである。

中国の隠者は、必ずしも山奥にこもって世俗と没交渉になるわけではない。多くの場合、世俗と距離を置きながらも、時政を厳峻かつ辛辣に諷刺する。この老人が自らを「愚」と称するのは、表面上は謙称であるが、決して自己を卑下しているわけではない。それは自らの賢明さを秘め隠す韜晦の所作であり、また孤高な自負心の裏返しでもある。この説話を典拠として、後世の詩文において、「愚公」は隠者をいう語となり、「愚公谷」（または略して「愚谷」）は、世俗を離れた隠棲の地を喩える語となる。

四　詩語としての「愚」

前章までに見てきた「愚」の概念は、歴代詩文の中でさまざまな形を以て中国の文人精神を表象するに至る。以下に、「愚」の意義を便宜的に幾つかのカテゴリーに分け、唐詩から用例を挙げながら、詩語としての「愚」の諸相を概観してみたい。

（一）「愚蒙」

『全唐詩』九百巻には、計三百七十四個の「愚」字の用例が見られる。その大半は「愚蒙」「愚昧」など原義の貶義で用いられているが、いかなる人物に対して、いかなる理由を以て「愚」と称するかは、詩意によってさまざまである。詩において人を「愚」と呼ぶのは、一般的に、智能や学識の低さをいうものではなく、道理を悟らぬこと、人生を誤っていることを指していう場合が多い。「愚」字は、しばしば詩人自身と価値観が異なる者に対して向けられる。白居易「凶宅」に、

嗟嗟俗人心　嗟嗟（ああ）　俗人の心
甚矣其愚蒙　甚しいかな　其の愚蒙なる
但恐災將至　但だ災の將（まさ）に至らんとするを恐れ
不思禍所從　禍の從（よ）る所を思わず

とある。権勢を誇り利禄を貪る「俗人」（高位高官）が、そうした権勢・利禄こそが身を滅ぼす禍の元であるという道理を悟らないさまを「愚蒙」と呼んで嘆嗟している。また、李白「古風」（其二十三）には、

人生鳥過目　人生　鳥の目を過ぐるがごとし
胡乃自結束　胡（なん）ぞ乃ち自ずから結束するや
景公一何愚　景公　一に何ぞ愚なる
牛山淚相續　牛山　涙　相続（つ）ぐ

とあり、斉の景公がかつて牛山に登り、人の命に限りあることを痛み悲しんだという行為を「愚」としている。この詩

の主旨は、はかない人生であるからこそ存分に楽しむべしとする享楽主義的人生観を詠ったものであり、悲嘆の涙を流すなどは愚の骨頂だというのである。

なお、歴史上の人物の暴政や失策に対して「愚」という評価が向けられることも少なくない。以下の二例は、秦の始皇帝に対するものである。

秦王築城何太愚　秦王　築城　何ぞ太だ愚なる
天實亡秦非北胡　天　実に秦を亡ぼすは　北胡に非ず　（王翰「飲馬長城窟行」）
黔首不愚爾益愚　黔首は愚ならず　爾益々愚なり
千里函關囚獨夫　千里　函関　独夫を囚う　（杜牧「過驪山作」）

（二）「愚直」

「愚」字は、他者に対してのみでなく、自分自身をいう第一人称の語としても詩文の中で常用される。「愚」の一字、または「愚生」「愚臣」「愚叟」などは謙遜の自称として用いられ、「愚見」「愚意」「愚策」「愚志」などもまた自分自身の言行をいう謙譲語である。

愚臣何以報　愚臣　何を以てか報いん
倚馬申微力　馬に倚りて　微力を申ぶ　（崔融「西征軍行遇風」）
愚夫何所任　愚夫　何の任うる所ぞ
多病感君深　多病　君に感ずること深し　（権德輿「病中寓直代書題寄」）

これらは、いずれも相手（多くの場合、天子や上官）に対して自らを卑下して称するものであるが、詩において「愚」を自称する際は、必ずしもそうした単なる慣用的な謙譲語として用いられるわけではない。高適「秋日作」に、

雲霄何處托　雲霄　何れの処にか托す
愚直有誰親　愚直　誰か親しむもの有らん
舉酒聊自勸　酒を挙げて　聊か自ら勧む
窮通信爾身　窮通　爾が身に信さん

とあるが、「愚直」は「古の愚や直なり」（『論語』「陽貨」篇）を典拠とする詩語であり、詩人の剛直な気概を示すものである。

杜甫はしばしば自らを「愚」と称しているが、それは字面通りの自己卑下の称ではない場合が多い。例えば、「上韋左相二十韻」に、

才傑俱登用　才傑　俱に登用せられ
愚蒙但隱淪　愚蒙　但だ隠淪す
長卿多病久　長卿　多病　久しく
子夏索居頻　子夏　索居　頻りなり

とあり、自らを世間から隠れて沈淪する「愚蒙」としながらも、その一方で、消渇を患った長卿（司馬相如）や、離群索居した子夏（孔子の弟子）に自らの境遇を重ね合わせて詠う。また、「自京赴奉先縣詠懐五百字」には、

杜陵有布衣　杜陵に布衣有り

老大意轉拙　老大にして　意は転(うた)た拙なり
許身一何愚　身に許すこと　一に何ぞ愚なる
竊比稷與契　窃(ひそ)かに比す　稷と契とに

とあり、自分は世渡り下手な老いぼれの平民でありながら、心の内では愚かしくも自らを古の稷や契（共に舜帝の賢臣）に比しているという。そしてさらに、「發同谷縣」では、

賢有不黔突　賢にも突を黔(くろ)まざる有り
聖有不暖席　聖にも席を暖めざる有り
況我飢愚人　況んや　我　飢愚の人をや
焉能尚安宅　焉んぞ能く尚お宅に安んぜむ

とある。「黔突」と「暖席」は、つねに世のために奔走し、長く家に落ち着いていることがなかったという墨子と孔子の故事をそれぞれ引いたものである。「飢愚の人」とまで呼んで自らを卑しめる反面、自分自身を古の聖賢と並べて詠っているのである。政界での不遇を自らの「愚直」な性癖に帰し、天下国家を事とする儒家的な使命感を以て「愚忠」を守り通した杜甫においては、「愚」という自虐的な響きの中に、詩人の心中に秘められた尊大なまでの自負心を感得することができよう。

（三）「賢愚」

「愚」と並列させて、または対偶の形で、反義の詩語として対照的に用いられるのが、「賢」と「智」である。

借問回心後　借問す　回心の後
賢愚去幾何　賢愚　去ること幾何ぞ（劉長卿「贈普門上人」）
貴賤與賢愚　貴賤と賢愚と
古今同一軌　古今　同に軌を一にす（聶夷中「住京寄同志」）
智士日千慮　智士　日々千慮し
愚夫唯四愁　愚夫　唯だ四愁するのみ（孟郊「百憂」）

「賢者」と「愚者」は、相異なる存在として詠われるよりも、むしろ「貴賤」も「賢愚」も畢竟人間である限り同じ存在であるという視点で詠われることが多い。杜甫「寄薛三郎中」に、

人生無賢愚　人生　賢愚無く
飄颻若埃塵　飄颻として埃塵の若し
自非得神仙　自ずから神仙を得るに非ざれば
誰免危其身　誰か其の身を危うくするを免れん

とあり、また白居易「對酒」に、

賢愚共零落　賢愚　共に零落し
貴賤同埋沒　貴賤　同に埋没す
東岱前後魂　東岱　前後の魂
北邙新舊骨　北邙　新旧の骨

とあるように、いつかは死んで滅び去る運命においては、「賢者」も「愚者」も何ら異なる所のないものとして詠われている。

「賢愚」を詠んだ詩句は、白居易の作に多くの用例があるが、「賢者」と「愚者」に対する社会通念を顚倒させて詠うものがしばしば見られる。「澗底松」には、

貂蟬與牛衣　貂蟬と牛衣と
高下雖有殊　高下　殊なる有りと雖も
高者未必賢　高者　未だ必ずしも賢ならず
下者未必愚　下者　未だ必ずしも愚ならず

とあり、「高」（貴）と「下」（賤）がそれぞれ「賢」と「愚」につねに結びつくわけではないとする。また、「感所見」には、

巧者焦勞智者愁　巧者は焦労し　智者は愁う
愚翁何喜復何憂　愚翁は何をか喜び　復た何をか憂う
莫嫌山木無人用　嫌う莫(なか)れ　山木の人の用うる無きを
大勝籠禽不自由　大いに籠禽の自由ならざるに勝(まさ)る

とある。「巧者」「智者」に対する世俗の価値観を否定し、泰然自若とした「愚者」を肯定的に詠うものであり、こうした道家流の逆説的な物言いの中に、白居易独自の達観した人生哲学を窺い見ることができる。

（四）「佯愚」

「愚」字を以て処世観を詠う思索的な詩の中では、『論語』「公冶長」篇に見える甯武子の「佯愚」がしばしば典故として用いられる。白居易「放言」（其一）には、

朝眞暮僞何人辨　朝真暮偽　何人か弁ぜん
古往今來底事無　古往今来　底事か無からん
但愛臧生能詐聖　但だ愛す　臧生が能く聖を詐るを
可知甯子解佯愚　知るべし　甯子が解く愚を佯るを

とある。魯の大夫臧文仲は「知者」とされていた人物であるが、分をわきまえない一面があり、『論語』の中では孔子が「何如ぞ其れ知ならんや」（「公冶長」篇）と非難している。いわば「聖」を飾る偽の「知者」であり、「愚」を装う甯武子こそが真の「知者」であると詠う。

このほか、張九齢「登荊州城樓」に、

直似王陵戇　直なること　王陵の戇に似て
非如甯武愚　甯武の愚に如くこと非ず

とあり、直言を好んで高祖劉邦から「戇」（馬鹿正直）の評を得た王陵と比され、またさらに、

醺醺若借嵇康懶　醺醺として　嵇康の懶を借るが若く
兀兀仍添甯武愚　兀兀として　仍お甯武の愚に添う　（杜牧「歙州盧中丞見惠名醞」）
孰謂原思病　孰か謂う　原思の病は

非關甯武愚　甯武の愚に関わること非ずと（権徳輿「奉和許閣老酬淮南崔十七端公見寄」）
已似馮唐老　已に馮唐の老に似て
方知武子愚　方めて知る　武子の愚を（呉融「寄貫休」）

とあるように、嵇康の「懶」、原憲の「病」、馮唐の「老」などと並べられている。このように、甯武子の「愚」は、特定の史実や逸話によって形作られた伝統的人物形象の典型の一つを示す詩語として詠われている。

（五）「愚谷」

第三章で述べたように、『説苑』「政理」篇に見える故事を典拠として、「愚公」は隠者、「愚谷」は隠棲の地をいう詩語となる。王維「愚公谷」（其三）に、

借問愚公谷　借問す　愚公谷
與君聊一尋　君と与に聊か一たび尋ねん
不尋翻到谷　尋ねずんば　翻って谷に到る
此谷不離心　此の谷　心を離れず

とあり、また、杜甫「贈比部蕭郎中十兄」に、

中散山陽鍛　中散　山陽の鍛
愚公野谷邨　愚公　野谷の邨
寧紆長者轍　寧ぞ長者の轍を紆らさむ

歸老任乾坤　　帰老し　乾坤に任さん

とある。「愚公」「愚谷」は、必ずしも『説苑』の故事の諷喩性を踏襲するものではない。栄達を断念したり俗塵を避けたりして世間から身を退くことを詠う際の常套的な詩語として広く用いられるが、韜晦と孤高を象徴的に示す「愚」字が自ずと高遠な気分を醸し出し、詩的イメージに厚みを与えている。

（六）「愚渓」

「愚」字に対してとりわけ強い思い入れを示した詩人が柳宗元である。「八愚詩」（佚）に冠した「愚渓詩序」は、全篇五百数十字の中で「愚」字を二十七個用いて集中的に「愚」を語っている。まず、「愚渓」の命名の由来について、

余は愚を以て罪に触れ、瀟水の上に謫せらる。（中略）古に愚公谷有り。今予は是の渓に家し、而して名能く定まる莫し。土の居る者、猶お斷斷然として、以て更めざるべからざるなり、故に之を更めて愚渓と為す。[20]

とある。続いて、「愚」字を以て景物を名付けた所以について、

夫れ水は、智者の楽しみなり。今是の渓独り愚に辱められるるは、何ぞや。蓋し其の流れ甚だ下くして、以て灌漑すべからず、又峻急にして坻石多く、大舟入るべからざるなり。幽邃浅狭にして、蛟竜も雲雨を興す能わざるを屑とせず。以て世を利する無くして、適に余に類す。然らば則ち辱めて之を愚とすると雖も可なり。[21]

と述べて、荘子の「無用の用」に基づいた議論を展開する。さらに、甯武子と顔回に言及し、

甯武子は邦に道無ければ則ち愚なり、智にして愚と為る者なり。顔子は終日違わざること愚の如し、睿にして愚と為る者なり。皆真の愚と為すを得ず。今余は有道に遭いて理に違い事に悖る、故に凡そ愚為る者、我に若くは莫き

なり。[22]

と語り、甯武子や顔回は真の「愚」にあらず、我こそは天下一の「愚」なり、と自虐的な響きの言を吐く。「愚溪詩序」は、政争に敗れた柳宗元が邵州の刺史に左遷され、さらに永州の司馬に貶謫された後に著されたものである。絶望的な境遇に置かれながらも不屈の精神を保ち続けたとされる彼の生き方を考え合わせると、柳宗元における「愚」の自称は、単なる謙遜や自嘲自卑の語ではない。表面的には、自らの「愚拙」が禍を招いたとするものの、内心では、自分は何ら罪を犯してはいないという矜持があり、またそうした思いを抱きながらも、さらなる迫害を免れるためには「愚」を以て韜晦せざるをえないという鬱屈した胸懐であったことが推察される。[23]

おわりに

本稿は、「愚」について、主に褒貶の別を軸として、古来のさまざまな文献からその諸相を概観した。「愚」字の大半は原義である貶義で用いられるものである。「愚蒙」「愚昧」「暗愚」「庸愚」など、他者に向けられれば侮蔑や譴責の意となり、自身について言えば自嘲や自卑の謙称となる。一方、「愚」字が褒義にも用いられることについては、先秦諸子の言説の中にすでにその素地を見ることができる。そもそも「愚」という人物形象は、ある意味で孔子の好みでもあった。利発で狡智な「巧言令色」型の人間よりも質朴で敦厚な「剛毅木訥」型の人間を評価する視点からすれば、「愚直」「愚拙」「愚鈍」などは必ずしも悪しき性質ではなく、不器用で小賢しさを欠くがゆえに、むしろ誠実で淳朴な性質として肯定的に評価されうるのである。道家においても、知識や智恵を否定する立場から「愚」はしばしば褒義に解釈され、聖人の心を表し「道」を体現する概念として捉えられている。

中国の精神文化の上で長く慈しまれてきた「愚」の一つの典型は、「愚に似て愚に非ず」という形象である。こうした形象が好まれる背景には、「大智如愚」（大智は愚なるが如し）という逆説的発想がある。この成語は、蘇軾の「賀歐陽少師致仕啓」に「大勇は怯なるが若く、大智は愚なるが如し」とあるのを直接の典拠とするが、こうした発想は、『老子』第四十五章に「大直は屈するが若く、大巧は拙なるが若く、大弁は訥なるが若し」と見え、また『史記』「老子韓非列傳」にも「君子は盛徳ありて、容貌は愚なるが若し」とあるように、古くから慣れ親しまれてきたものである。「愚」が自嘲から自負へ容易に反転する所以は、正にこうしたパラドックスを時として精神的な支えとしてきた中国古代の知識人の思考様式にある。「愚公」「愚谷」が隠者と関わる語であり、「愚」が世俗的な価値観と対峙する概念として用いられることとも相俟って、古来、文人たちが反俗的な姿勢を誇示したり、世を達観した境地を言明したりする際に、彼らは敢えて「愚」を以て自任したのである。

註

（1）原文：「戇也、從心從禺。禺、猴屬、獸之愚者。」

（2）「愚」の字義・用例については、劉長桂「〝愚〟詮」（『阜陽師院学報』一九八六年第三期）、邢德波「〝愚〟詞性淺説」（『殷都学刊』二〇〇二年第三期）など参照。

（3）『論語』における「愚」については、張勇「孔子説〝愚〟」（『東方論壇』二〇〇四年第四期）など参照。

（4）原文：「好仁不好學、其蔽也愚。好知不好學、其蔽也蕩。好信不好學、其蔽也賊。好直不好學、其蔽也絞。好勇不好學、其蔽也亂。好剛不好學、其蔽也狂。」

（5）原文：「唯上知與下愚不移。」

(6) 原文：「吾與回言終日、不違如愚。退而省其私、亦足以發。回也不愚。」
(7) 原文：「甯武子邦有道則知、邦無道則愚。其知可及也、其愚不可及也。」
(8) 甯武子の「愚」については古来諸説あり、大きく「佯愚論」と「真愚論」に分かれる。後者は、甯武子が無道の成公にも誠意を尽くして仕えた「愚忠」を称えるものである。（前掲注3張勇論文二五頁参照。）本稿は、「佯愚論」に基づいて論を進める。
(9) 原文：「古之狂也肆、今之狂也蕩。古之矜也廉、今之矜也忿戾。古之愚也直、今之愚也詐而已矣。」
(10) 原文：「柴也愚、參也魯、師也辟、由也喭。」
(11) 道家における「愚」については、杜会「論老子的愚人思想」（『錦州師院学報』一九九〇年第一期）、黄忠晶「〝無欲〟〝愚民〟和〝小國寡民〟――老子社会思想略論」（『中共浙江省委党校学報』二〇〇八年第一期）、張尚仁「道家〝愚〟的學理」（『思想戦線』二〇一一年第二期）など参照。
(12) 原文：「夫禮者、忠信之薄、而亂之首。前識者、道之華、而愚之始。」
(13) 原文：「衆人熙熙、如享太牢、如春登臺。我獨泊兮其未兆、如嬰兒之未孩、乗乗兮若無所歸。衆人皆有餘、而我獨若遺。我愚人之心也哉、沌沌兮。俗人昭昭、我獨若昏。俗人察察、我獨悶悶。忽兮若海、漂兮若無所止。衆人皆有以、而我獨頑似鄙。我獨異於人、而貴食母。」
(14) 原文：「古之善爲道者、非以明民、將以愚之。民之難治、以其智多。故以智治國、國之賊、不以智治國、國之福。」
(15) 原文：「旁日月、挾宇宙、爲其脗合、置其滑涽、以隷相尊。衆人役役、聖人愚芚、參萬歳而一成純。萬物盡然、而以是相蘊。」
(16) 原文：「性修反德、德至同於初。同乃虚、虚乃大。合喙鳴、喙鳴合、與天地爲合。其合緡緡、若愚若昏。是謂玄德、同乎大順。」
(17) 原文：「南越有邑焉、名爲建德之國。其民愚而朴、少私而寡欲。知作而不知藏、與而不求其報。不知義之所適、不知禮之所將。猖狂妄行、乃蹈乎大方。」
(18) 原文：「俗謂之愚者、未必非智也。」「俗謂之智者、未必非愚也。」
(19) 原文：「此夷吾之愚也。使堯在上、咎繇爲理、安有取人之駒者乎。若有見暴如是叟者、又必不與也。公知獄訟之不正、故與之耳。請退而修政。」
(20) 原文：「余以愚觸罪、謫瀟水上。（中略）古有愚公谷。今予家是溪、而名莫能定。土之居者、猶斷斷然、不可以不更也、

故更之爲愚溪。」

(21) 原文：「夫水、智者樂也。今是溪獨見辱於愚、何哉。蓋其流甚下、不可以灌溉、又峻急多坻石、大舟不可入也。幽邃淺狹、蛟龍不屑不能興雲雨。無以利世、而適類於余。然則雖辱而愚之可也。」

(22) 原文：「甯武子邦無道則愚、智而爲愚者也。顏子終日不違如愚、睿而爲愚者也。皆不得爲眞愚。今余遭有道而違於理悖於事、故凡爲愚者、莫我若也。」

(23) 戸崎哲彦「柳宗元の「愚」称について――「愚溪詩序」・「愚溪対」の創作とその心理の深層にあるもの」(滋賀大学経済学会『彦根論叢』第二八三・二八四号、一九九三年十一月)、賈立「談柳宗元和《愚溪詩序》、《愚溪對》」(京都外国語大学『研究論叢』第四七号、一九九六年九月)、方介「柳宗元的愚者形象」(『鉄道師院学報』一九九七年第二期)、呂国康「柳宗元〝愚〟説的由來與發展」(『運城高等専科学校学報』二〇〇二年第四期)など参照。